

漢点字 講習用 テキスト

初級編 第五回 (全十回)

横浜漢点字羽化の会
二〇〇六年七月十五日

目次

6 基本文字 (4)	1
発音文字と漢数字 (二)	
1. 発音文字	1
円⠠⠠⠠ 鬼⠠⠠⠠ 告⠠⠠⠠ 事⠠⠠⠠ 生⠠⠠⠠ 争⠠⠠⠠ 対⠠⠠⠠	
拌⠠⠠⠠ 反⠠⠠⠠ 民⠠⠠⠠	
♪愛唱歌 「グリーン・グリーン」	7
2. 漢数字 (二)	8
甲⠠⠠⠠ 乙⠠⠠⠠ 丙⠠⠠⠠ 丁⠠⠠⠠ 戊⠠⠠⠠ 己⠠⠠⠠ 庚⠠⠠⠠	
辛⠠⠠⠠ 壬⠠⠠⠠ 癸⠠⠠⠠	
♪♪愛唱歌 「浦島太郎」	14
読みの練習 (20)	15
書き取り問題 (20)	17
7 複合文字 (3)	19
発音文字・漢数字 (二) と、 これまでに紹介された基本文字によって構成される文字	
* 「発音文字」を部首として含む文字。	
※ 「生⠠⠠⠠」を部首として含む文字一つ。	19
星⠠⠠⠠	
※ 「反⠠⠠⠠」を部首として含む文字七つ。	20
仮⠠⠠⠠ 坂⠠⠠⠠ 阪⠠⠠⠠ 板⠠⠠⠠ 飯⠠⠠⠠ 返⠠⠠⠠ 版⠠⠠⠠	

* 「漢数字（二）（十干）」を部首として含む文字。	
※ 「甲」を部首として含む文字一つ。	23
押	
※ 「乙」を部首として含む文字一つ。	23
乱	
※ 「丁」を部首として含む文字六つ。	24
打 町 灯 頂 貯 庁	
※ 「戊」を部首として含む文字五つ。	27
・ 「成」とそれを部首として含む文字二つ。	
成 誠 城	
・ 「戊」の垂れの内側に、縦に「一」と「口」が入る形の文字、「咸」を部首として含む文字二つ。	
感 減	
※ 「己」を部首として含む文字三つ。	30
紀 記 起	
※ 「辛」を部首として含む文字一つ。	32
辞	
※ 「壬」を部首として含む文字二つ。	33
・ 「任」とそれを部首として含む文字一つ。	
任 賃	
♪♪♪愛唱歌 「追憶」	34
読みの練習 (21)	35
書き取り問題 (21)	37
8 複合文字 (4)	39
1. 紹介し落としたもの二十三字	
映 革 揮 禁 筋 形 研	
県 吾 孔 乳 祭 際 察	
算 実 捨 洗 箱 批 弁	
訪 郵	
♪♪♪愛唱歌 「村祭」	57
読みの練習 (22)	58
書き取り問題 (22)	59
⊕ ティータイム	61
【附】 既習漢点字一覧	62

6 基_三文_三 (4)

音文_三と漢_三 (三)

章では、つとつ_三の〈基_三文_三〉をご紹_三します。

〈基_三文_三〉とは、“偏”とか“旁”とか、他の文_三の部_三 (パーツ) となる、最も_三さい_三位_三の文_三を_三います。これまでに〈漢_三 (三)〉、_三マスで表す〈第_三基_三文_三〉と、〈_三較文_三〉をご紹_三しました。

今_三は、〈_三音文_三〉と、〈漢_三 (三)〉です。

〈_三音文_三〉は、_三は少ないのですが、_三変_三事_三な文_三ばかりです。他の基_三文_三のグループに_三れ難いために、川_三生_三は、読みを取り_三れて、別_三に作られました。ここでは10_三の文_三をご紹_三します。

〈漢_三 (三)〉は、これまでにご紹_三した漢_三とは趣を異にしています。初めは随_三めかしいものばかりだな、とお感じになるかもしれません。_三つ_三つ取り_三げると、今現_三、_三わなくても済む文_三かもしれせん。

しかし、部_三となつて多くの文_三を構成しますし、そんな文_三の読みや_三にも、_三きく反映されるものです。その_三では、もう少し_三に_三って、これら_三つ_三の文_三も、_三事_三な文_三だということがお_三かりいただけるようになります。

この〈漢_三 (三)〉も、10_三ご紹_三します。

1. 音文_三

*ご紹_三の順は、漢_三の符号をカナ読みして、それらを_三音順にしたものです。

(1) 円_三 エン

まる - い まろ - やか まど - か つぶ - ら

_三構えの_三の線がない_三が_三いた形の_三に、_三の線の_三ん_三から短い縦の線、その_三に接して両側の縦の線を差し渡すように横線を置いた形の文_三です。この文_三の構えは、「円構え」と呼ばれます。この文_三の原形は、_三い形の容_三を表すものでした。“まるい、まろや

しかしこの文「告知、通告、報告」と、「にものごとをえる」というだけでない、強い「い」が含まれます。漢では、「」で表されます。

「知」 「報」 「通」 「告」
 「申」 「広」 「公」

* “こうこく”と読む熟がっつていますが、「広」は、新のり込みや電のり、テレビのCMなどで知らせるもので、般には、商業のものを使います。「公」は、や公共が、官報に掲載して知らせることを使います。

(4) 事 ジズ こと

算にうの棒を筒に入れて、それを役がにった形を象った文です。“こと”とは、事や物事と、抽象的なを表すです。熟としては「事実、事件、事物」のように用いられます。またこの文には、“つかえる”というがあって、しなければならないこと、毎こなしてくべきこととして、「仕事、用事、事」のように、熟に含まれて用いられます。文章ので“こと”というが用いられるとき、通常、強いを使す場を除いて、仮名で書かれます。漢では、「」で表されます。

「実」 「件」 「物」 「象」 「故」
 「幹」 「監」 「用」 「家」 「俗」
 「雑」 「仕」 「物」
 「荒」 「始め」

* の例に、“かんじ”と読む熟がっつていますが、「幹事」は、政党やの運営の責任者です。「監事」は、などの、運営のお役です。

(5) 生 𠄎𠄎𠄎 セイ ショウ い-きる い-かす い-ける
 う-まれる う-む は-える は-やす なま
 き お-う な-る

漢 𠄎𠄎𠄎の 𠄎𠄎の 𠄎𠄎ん 𠄎𠄎に縦線を 𠄎𠄎ねて、𠄎𠄎は 𠄎𠄎の横線から突き 𠄎𠄎て、𠄎𠄎は 𠄎𠄎の横線で 𠄎まる形、𠄎𠄎の横線の 𠄎𠄎肩にカタカナの「ノ」を添えた形の文 𠄎𠄎です。𠄎𠄎、𠄎の 𠄎𠄎に植物が芽吹いた形、生命 𠄎の漲った形を象ったものと 𠄎われます。ご覧のように、ここにご紹 𠄎𠄎するだけでも、𠄎𠄎山の訓読みがあります。主な訓は、「いきる、いかす、いける」、生きてること、生き生きした 𠄎𠄎𠄎、生命の躍 𠄎𠄎を 𠄎𠄎𠄎𠄎します。「うまれる、うむ、はえる、なる」、生命が芽生えて生気の立ち 𠄎𠄎る様 𠄎を表します。「き、なま」、𠄎𠄎粹なもの、生きてるものそのままです。「おう」、𠄎𠄎の茂ること、盛んに茂って繁 𠄎𠄎する様 𠄎を表します。この文 𠄎𠄎は以 𠄎𠄎のように、𠄎𠄎変広く熟 𠄎𠄎に用いられます。「生命、生気、生 𠄎𠄎、生 𠄎𠄎」は、生きてることそのものに 𠄎𠄎𠄎わっています。「生誕、𠄎生、𠄎生」は、新しい命が生まれ 𠄎𠄎ること、「生産」は、𠄎𠄎料を集めて別のものを作り 𠄎𠄎すことを 𠄎𠄎𠄎𠄎します。また 𠄎校には「𠄎生」がいて、「生 𠄎𠄎」がいます。𠄎𠄎校では生 𠄎𠄎が、「𠄎𠄎𠄎生」から「𠄎𠄎𠄎生」までいます。漢 𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎命」 「𠄎𠄎気」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎誕」 「𠄎𠄎物」 「𠄎𠄎産」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎け 𠄎𠄎」 「𠄎𠄎け垣」 「芽 𠄎𠄎える」 「誕 𠄎𠄎𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎ビール」 「灘の 𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎い茂る」

(6) 争 𠄎𠄎𠄎 ソウ あらそ-う

爪と 𠄎を象った文 𠄎𠄎です。「あらそう」とは、爪をかけて引き 𠄎𠄎う、引き 𠄎𠄎つてものを取り 𠄎𠄎う様 𠄎を表します。熟 𠄎𠄎では、「戦争、鬭争、争奪」と、領 𠄎や権 𠄎をめぐって戦うこと、戦ってものや領 𠄎を奪うことを表します。また、「いさめる」という訓もあって、争う 𠄎を鎮めるといふ 𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。漢文訓読では、「いかでか」と読んで、反 𠄎の助 𠄎𠄎詞の 𠄎𠄎きをします。漢 𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎奪」 「𠄎𠄎鬭」 「戦 𠄎𠄎」 「鬭 𠄎𠄎」 「競 𠄎𠄎」

「アイロニー」

* "みんぞく" と読む熟語がアイロニーしています。「アイロニー族」は、アイロニーやアイロニー習熟語を共習して、同族意識によって結びついている人々を総称するものです。「アイロニー俗」は、人々のアイロニー、アイロニー統、アイロニーなどの文脈の総称で、それを研究するのが「アイロニー俗」です。

♪ 愛の歌 ♪

グリーン・グリーン

岡 輝 (ひかる) 作詞
バリー・マクガイア 作

- 1 ある パパとふたりで りったさ
このにきる喜び そして 悲しみのことを
グリーン グリーン 青空には 鳥が歌い
グリーン グリーン のには ララ 緑がもえる
- 2 その パパがったさ ぼくを胸に抱き
つらく悲しいにも ラララ 泣くんじゃないと
グリーン グリーン 青空には そよ風ふいて
グリーン グリーン のには ララ 緑がゆれる
- 3 ある ぼくはめて そして 知ったさ
このに つらい悲しいがあるってことを
グリーン グリーン 青空には 雲がり
グリーン グリーン のには ララ 緑がさわぐ

※ 原は60年代のアメリカのフォークバンドの歌です。
の歌詞は、3番までがよく歌われていますが、
7番まであり、戦歌的な内容となっています。

2. 漢 () ()

ここに〈漢 ()〉としてご紹介するものは、「こう、おつ、へい、てい、……」と、ものの順序や劣を表すときに用いられる、の文です。〈干 (じっかん)〉と呼ばれます。

昔で、の満ち欠けのである約を、としました。それをさらにしたのを「旬」と呼んで、「旬・旬・旬」としました。それぞれの「旬」はずつあって、そのの順序を表したのがこのの文だとされます。

ってこのの文は、のものもの考えである「陰陽 (いんよう)」と「 (ごぎょう)」に割り当てられることとなります。これが「干支 (えと)」です。

「干支」では「陰陽」を、「兄 (え)」と「弟 (と) (このテキストでは、まだてていません)」で表します。「兄」が「陽」、「弟」が「陰」です。これが「えと」と呼ばれるです。

「」は、「木 (もく)・火 (か)・土 (ど)・金 (ごん)・水 (すい)」のつの素です。このつの素が、このの羅象の物を作り、現象を司っていると考えられました。この「」を「兄弟 (干支、陰陽)」のつに当てて、それをさらにこのの文に当てたのが、この〈干〉です。

もう一つ、ここでは詳に触れませんが、〈干〉と切っても切れないにある〈支 (じゅうにし)〉について、簡にご紹介します。

現は文も達して、たちがっている暦も、宇宙規模の算に基づいて作られたものです。の始まりをにするかといった違はあるにしても、基的には、はつの暦をっているといいのでしょうか。

しかし文ができたころは、暦を作ることが、為政者のきな仕事でした。〈支〉は、その暦作りの法則、黄をとしてを表すものからされました。

暦はを位としますが、それをに当てはめれば、の刻を表すこととなります。また地理に用すれば、の角をすることとなります。このように〈支〉は、暦・刻・角の基準として達したものでした。

たちが知っている〈支〉は、の物で表されています。「子 (ね)・丑 (うし)・寅 (とら)・卯 (う)・辰 (たつ)・巳

「𠄎𠄎乙丙丁」 「𠄎𠄎羅」 「𠄎𠄎胃」 「船の𠄎𠄎板」
 「𠄎𠄎𠄎い声」 「𠄎𠄎𠄎 (きのえね)」 「𠄎𠄎𠄎園球場」
 「𠄎𠄎の𠄎𠄎より𠄎𠄎の功」 「𠄎の𠄎𠄎と足の𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎虫」 「𠄎𠄎蟹」

(2) 乙 𠄎𠄎 オツ イツ きのと

𠄎干の第𠄎番𠄎です。骨で作ったへらを象った文𠄎𠄎です。「甲𠄎𠄎」の次、𠄎𠄎番𠄎の𠄎𠄎𠄎で用いられます。また、訓読の熟𠄎で“おと”と読んで、「𠄎𠄎い𠄎」、「…より劣っている」とも用いられます。“きのと”とは、𠄎𠄎𠄎の「木𠄎」の弟の𠄎𠄎𠄎で、「甲𠄎𠄎」と𠄎𠄎をなして「陰」を表します。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎丙丁」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎 (きのとひつじ)」

(3) 丙 𠄎𠄎 ヘイ ヒョウ ひのえ

𠄎干の第𠄎番𠄎です。「一𠄎𠄎」の𠄎𠄎に「円𠄎𠄎構え」、𠄎𠄎の𠄎𠄎に接して𠄎𠄎構えの𠄎𠄎へ向かって「人𠄎」の𠄎𠄎が入る形の文𠄎𠄎です。神様への供えものを容れた𠄎𠄎を載せる台を象った文𠄎𠄎と𠄎われます。またその台の、張った脚の形とも𠄎われます。そこから掴んだり握ったりするために、ものに𠄎𠄎けた“え”の原𠄎𠄎とも𠄎われます。𠄎𠄎に𠄎𠄎て𠄎𠄎た文𠄎𠄎では「病𠄎」の𠄎𠄎に含まれています。“やまい”に犯されて、身𠄎𠄎が硬𠄎𠄎して突っ張った形と𠄎われます。“ひのえ”とは、𠄎𠄎𠄎の「火𠄎」の𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎で、陽を表します。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎丁」 「𠄎𠄎午 (ひのえうま)」

(4) 丁 𠄎𠄎 テイ チョウ ひのと

𠄎干の第𠄎番𠄎です。縦と横の線がアルファベットのTの𠄎𠄎型に𠄎𠄎なった形で、縦の線の𠄎𠄎が、𠄎𠄎にはねた形の文𠄎𠄎です。ものを打ち𠄎𠄎けるクギの形を象っていると𠄎われます。町の𠄎𠄎の𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎もあって、「丁𠄎𠄎路」とは、縦横に交差して、𠄎𠄎𠄎に伸びているうちの、

♪ ♪ 愛 歌 ♪ ♪

浦島

文部省 歌

- 1 昔々浦島は
助けた に に れられて
竜宮城へ て れば
にもかけない美しさ
- 2 に 姫様の御馳 に
鯛やひらめの舞踊 (まいおどり)
ただ珍しく に 白く
のたつのも夢の (うち)
- 3 遊びにあきて気がついて
お暇乞 (いとまごい) もそこそこに
帰る途 の楽しみは
みやげに貰った 箱
- 4 帰って ればこはいかに
居た も も無く
路 (みち) に きあう 々は
顔も知らない者ばかり
- 5 に さに蓋 (ふた) 取れば
あけて悔しき 箱
からぱっと白
たちまち はお爺さん

※ 治 4 4 の尋常 校 歌 (2) です。
同じ に「法師」や「桃」の
歌も されました。

- (30) 着物の布であった。
- (31) お、しました。
- (32) やつとのでみ倒した。
- (33) で着物です。
- (34) 復習が切ですよ。
- (35) の表がっている。
- (36) 子どもが胸をらす。
- (37) す刀ですかさずまたへ。
- (38) 湯が沸きすぎて煮えっていた。
- (39) 族運はのあちこちで起きている。
- (40) の声をけ。
- (41) 足のがかゆい。
- (42) よろい、かぶとのを胃とう。
- (43) 虫がにいた。
- (44) にすました、いいだねえ。
- (45) 午の迷は今でもある。
- (46) 寧に仕をしなさい。
- (47) の番地はどこですか。
- (48) 干、じっかん の番は。
- (49) 克はです。
- (50) それは利主義の考えでしょう。
- (51) を空しくする。
- (52) 申の夜は寝ないようにしたという。
- (53) ここで香料をれます。
- (54) を返せないのがいい。
- (55) いわさびが、きなのです。
- (56) 申の乱。
- (57) 干では「きのと」、は「ひのと」、と読んだのです。
- (58) 干の「かのえ」は、「かのと」はです。

書き取り 題 (20)

- (1) えんだかはにほんにとってプラスか？
- (2) まるいちきゅうをみたひとはなんにんもいる。
- (3) このわがしはまるやかなあじですね。
- (4) まどかなふんいきがすきです。
- (5) つぶらなひとみにはよわいんです。
- (6) きしぼじんはあんざんのかみですよ。
- (7) あのひとはしごとのおにだ。
- (8) がんのこくちはききたくない。
- (9) こくはくします、わたくしは…。
- (10) あににやまいをつける。

- (11) じぜんにしらせたのでよかった。
- (12) こうずかというごをあまりきかなくなった。
- (13) ことこまかにせつめいをした。
- (14) このくにでわたしはじんせいをおくる。
- (15) いっしょう、あなたにつきあいます。
- (16) いきじびきといわれるひと。
- (17) いかすもなにもあなたのこころひとつ。
- (18) くさきのはなをうまくいける。
- (19) うまれたとちはこいしい。
- (20) こをうむのは、はは。

- (21) つちのしたでは、もうねがはえています。
- (22) ひげをはやしたひとだった。
- (23) なまみずにきをつけないと…。
- (24) きいっぼんのさけ。
- (25) あのこのおいたちは？
- (26) これは、はなだけでみはならないたねです。
- (27) きょうそうしゃかいはこりごり。
- (28) むかし、みずあらそいがあったところ。
- (29) ごたいさんでしようぶがついた。

- (30) ふたつひとくみをいつついいいます。
(31) おてをはいしゃくしたいのですが。
(32) こころのなかでおがんでいます。
(33) めのがいったんずつになっているので、たんものという。
(34) それは、はんしゃかいせいをおびている。
(35) ゆびがよくそる。
(36) おうさまはからだをそらしていいました。
(37) じょうげをひっくりかえしてつかう。
(38) ぐんばいがそこでかえった。
(39) みんなしゅくでみんなをきいた。
(40) たみとはこっかのひとりひとりをさす。
- (41) かめのこうよりとしのこう。
(42) ちちとはははかんぱんにいった。
(43) きのえねとかいて「きのえね」とよむ。
(44) ちよっと、おつなあじがするねえ。
(45) むかしのつうちひょうは、こうおつへいだったそうです。
(46) うまのせわをするひとをばていという。
(47) にちよめのあのみせでまつよ。
(48) ぼしんせんそうは、なんねんにあった？
(49) かれとわたしはじゅうねんらいのちきだ。
(50) じこちゅうしんのひとはこのまれない。
- (51) おのれ、いまにみろ！
(52) こうしんづかをみたことがある。
(53) さらにしんくをかさねたのだった。
(54) つらいせいかつをおくった。
(55) からくちのさけがこのみだ。
(56) じんとかいて「みずのえ」とよんだ。
(57) じっかんのじゅうばんめはききで、「みずのと」とよみました。
(58) じっかんのぼは「つちのえ」、きは「つちのと」とよんだ。

7 複音文 (3)

音文・漢 () と、
 これまでに紹介された
 基文によって構成される文

この章では、前章でご紹介した基文、「音文」と「漢 () (干)」と、これまでにご紹介した「漢 ()」、「第基文」、「較文」、そしてそれらの似文によって構成される文をご紹介します。

* 「音文」を部として含む文。

※ 「生」を部として含む文つ。

(1) 星 セイ ショウ ほし

「日」の「生」が置かれた形の文です。「日」は、きらきらと光るもの、美しく輝くものを表しています。「生」は、瑞々しさ、いきいきしていることを表しています。“ほし”とは、夜空を美しく飾る、きらきら光るもの、美しく輝くもの、神秘的な光を放つものをいいます。現では、宇宙を構成する、恒星や惑星をします。また輝くもののから、を、や経済の立役者、などを指します。またしばしば“ほし”の運から、生、の将を予測する「占い」に用いられます。漢では、「日 (日)」と「生 (生)」で表されます。

「座」 「条旗」

・ ・ ・ ・

「恒」と惑星 「工衛」

「けの」と宵の 「空」

「占い」 「流れ」 「帯」 「綺羅」

「白」と黒」

※「反」を部として含む文字つ。

(2) 仮 カ ケ かり かり - に

「人偏」の側に「反」が置かれた形の文です。この「反」の形は、「そる、かえす」を表すものではなく、布を覆って、覆いをかけることを象っているとされます。「かり」とは、的に、にわせに、取り敢えずの形で、ものを覆って当の姿をせず、にだけ飾ることを表しています。「かりに」と読んで、「実際ではないが…と仮定して」というに用いられます。漢では、「(人)」と「(反)」で表されます。

「定法」 「契」

(3) 坂 ハン バン さか

「土偏」の側に「反」が置かれた形の文です。「さか」とは、地がり返って迫りあったところをにしていて、陵・峠・山岳に差しかかっていることを表します。「さか」とはそので、つの領域の端、他の領域との境、あるいは他の領域への通路をします。漢では、「(土)」と「(反)」で表されます。

「(ぼんどう・たろう)」 「(ぼんさい)」
 「急」 「」 「の雲」

(4) 阪 ハン バン さか

「こざと偏」の側に「反」が置かれた形の文です。「」の異で、も同じです。地が迫りっていることで、つの領域の境を表しています。ただしこの「阪」は、主に地名に用いられます。漢では、「(こざと偏)」と「(反)」で表されます。

「・」

(5) 板 𣎵𣎵 𣎵𣎵 ハン バン いた

「木 𣎵𣎵偏」の 𣎵𣎵側 に「反 𣎵𣎵𣎵」が置かれた形の文 𣎵𣎵𣎵 です。「反 𣎵𣎵𣎵」は 𣎵𣎵𣎵り返っている様 𣎵𣎵、この「木 𣎵𣎵」を 𣎵𣎵𣎵えて 𣎵𣎵を薄く削って 𣎵𣎵𣎵り返ったもの、𣎵𣎵でできた板を 𣎵𣎵𣎵𣎵します。建築や 𣎵𣎵の素 𣎵𣎵𣎵として欠かせないものです。「いた」は後に 𣎵𣎵製ばかりでなく、平たいもの全般を指す 𣎵𣎵として用いられるようになります。また 𣎵𣎵や 𣎵𣎵の「いた」は、𣎵𣎵の 𣎵𣎵現以前には、文 𣎵𣎵𣎵を書き留めるものとして貴 𣎵𣎵𣎵なものでした。𣎵𣎵𣎵って、文 𣎵𣎵𣎵の書かれた「いた」は、掲 𣎵𣎵して、お 𣎵𣎵𣎵から 𣎵𣎵𣎵げ知らせるメディアとして用いられました。漢 𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵では、「𣎵𣎵 (木 𣎵𣎵)」と「𣎵𣎵 (反 𣎵𣎵𣎵)」で表されます。

「𣎵𣎵𣎵書」 「𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵」 「鉄 𣎵𣎵𣎵」 「黒 𣎵𣎵𣎵」
「𣎵𣎵𣎵壁」 「𣎵𣎵𣎵敷き」 「𣎵𣎵𣎵塀」 「𣎵𣎵の延べ 𣎵𣎵𣎵」
「腰 𣎵𣎵𣎵」

(6) 飯 𣎵𣎵𣎵 𣎵𣎵 ハン めし いい

「食 𣎵𣎵偏」の 𣎵𣎵側 に「反 𣎵𣎵𣎵」が置かれた形の文 𣎵𣎵𣎵 です。「食 𣎵𣎵」の文 𣎵𣎵𣎵に含まれる「良 𣎵𣎵𣎵」は、粒の揃った、𣎵𣎵𣎵𣎵の穀物を象っています。「反 𣎵𣎵𣎵」は音符であるとともに、穀物を蒸した 𣎵𣎵𣎵に、𣎵𣎵𣎵きく膨らむ様 𣎵𣎵を表しています。「めし」とは、そのようにして炊き 𣎵𣎵𣎵げた穀物、とりわけ米飯を 𣎵𣎵𣎵𣎵します。「いい」とは、「めし」の 𣎵𣎵𣎵𣎵で、現 𣎵𣎵𣎵では地名や 𣎵𣎵名の読みとして残っています。また幼児 𣎵𣎵として、「まま」と読まれることもあります。漢 𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵では、「𣎵𣎵 (食 𣎵𣎵)」と「𣎵𣎵 (反 𣎵𣎵𣎵)」で表されます。

「𣎵𣎵𣎵盒」 「米 𣎵𣎵𣎵」 「赤 𣎵𣎵𣎵」 「残 𣎵𣎵𣎵」
「𣎵𣎵𣎵𣎵温泉」

(7) 返 𣎵𣎵𣎵 𣎵𣎵 ヘン かえ - す かえ - る

「反 𣎵𣎵𣎵」に「しんによう」を 𣎵𣎵𣎵えた形の文 𣎵𣎵𣎵 です。「かえす」とは、𣎵𣎵𣎵へもどす、𣎵𣎵𣎵た 𣎵𣎵へもどす、「かえる」とは、𣎵𣎵𣎵へもどる、とって返す、すなわちこの文 𣎵𣎵𣎵は、向きを 𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵に変えて 𣎵𣎵𣎵の 𣎵𣎵へ 𣎵𣎵むこと

を返します。返の返を返す、おいやお舞いのお返しをする、座布を裏返す、裏の裏を返すなどと用いられます。では、“かえし”と読んで、長歌の後に添えられた短歌や贈歌（が歌をやり取りすること）の際の返歌を返します。漢では、「（しんにょう）」と「（反）」で表されます。

「却」 「」 「濟」 「」
 「書」 「」 「送」
 「」 「納」 「杯」 「」
 「」 「礼」 「」 「代」
 「すすも」 「し縫い」 「り」
 「り咲き」 「り」 「りち」
 「趣し」 「引きす」 「燕し」
 「し」 「繰りす」 「仕し」 「宙り」
 「蜻蛉り」

(8) 版 ハン

「片偏」の側に「反」が置かれた形の文です。「片」は、つで組の、を薄く削った切れ、切れ端のを表す文で、「反」も薄く削った、りったを表します。“ハン”とは、文を刻んで印刷に用いるので、“ふだ、いた”の訓があります。狭義には、を組んだ後に作られる版や、孔版印刷の原を指しますし、広義には印刷し、製し、するという、版業全般のにも用いられます。くでは、壁をめるために用いるののがあります。漢では、「（片）」と「（反）」で表されます。

「」 「」 「」 「」
 「」 「孔」 「原」

* 「漢𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎) (𠄎干)」を部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎。

※ 「甲𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎𠄎𠄎つ。

(9) 押𠄎𠄎 オウ お-す お-さえる

「手𠄎𠄎偏」の𠄎𠄎側に「甲𠄎𠄎」が置かれた形の文𠄎𠄎です。「おす、おさえる」とは、𠄎𠄎から𠄎𠄎へ押し𠄎𠄎ける、「甲𠄎𠄎」は𠄎𠄎からものを被せること、「手𠄎𠄎」は、それを𠄎𠄎から𠄎𠄎で押し𠄎𠄎けることを表します。𠄎𠄎から押し𠄎𠄎けることから、𠄎𠄎で押し切る、押し𠄎𠄎けるようにものごとを運ぶという𠄎𠄎𠄎𠄎にも用いられます。また、借𠄎𠄎に𠄎𠄎𠄎𠄎する抵当を押さえるとも用いられます。「印を押す」「𠄎𠄎𠄎𠄎を押さえる」「担𠄎𠄎を押さえる」、また「もう𠄎𠄎押し」「押しが強い」などと用いられます。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (甲𠄎𠄎)」と「𠄎 (手𠄎𠄎)」で表されます。𠄎𠄎𠄎𠄎が逆になっています。

「𠄎𠄎印」 「𠄎𠄎捺」 「𠄎𠄎収」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」
「𠄎𠄎し𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎し𠄎𠄎ける」 「𠄎𠄎𠄎し𠄎𠄎」

※ 「乙𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎𠄎𠄎つ。

(10) 乱𠄎𠄎 ラン みだ-れる みだ-す

「舌𠄎𠄎」の𠄎𠄎側に、アルファベットのJの𠄎𠄎を、向きを𠄎𠄎𠄎𠄎にして置いた形の文𠄎𠄎です。Jの向きを𠄎𠄎𠄎𠄎にした形とは、「乙𠄎𠄎」の略𠄎𠄎で、𠄎𠄎から𠄎𠄎さえるという𠄎𠄎𠄎𠄎を表しています。𠄎𠄎側の「舌𠄎𠄎」も、𠄎𠄎を象ったものではなく、もつれた𠄎𠄎を解いている様𠄎𠄎を表すと𠄎われます。「みだれる、みだす」とは、もつれて筋𠄎𠄎の立たない状𠄎𠄎、「混乱、内乱、戦乱、𠄎𠄎乱」と、𠄎𠄎𠄎𠄎の乱れ、政治の乱れ、𠄎𠄎の𠄎𠄎の乱れを表す𠄎𠄎として用いられます。歴𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎きな変革期の内戦を「乱𠄎𠄎」と呼ぶのは、それに𠄎𠄎立つ𠄎𠄎𠄎𠄎のモラルの乱れ、𠄎𠄎制の緩みと混乱への変𠄎𠄎を捉えてのことです。また、「乱された𠄎、気𠄎𠄎ちの乱れ、乱れた髪や服装」のように、平常𠄎𠄎を失ってとりとめなくなった様𠄎𠄎を表す𠄎𠄎にも用いられます。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (舌𠄎𠄎)」と「𠄎 (乙𠄎𠄎)」で表されます。

「暴者」 「獲」 「雲」
 「気流」 「雑」 「痴気騒ぎ」
 「表」 「打戦」 「射」 「筆文」
 「脈経営」 「不」 「散」 「混」
 「波」 「戦」 「申の」
 「狂」 「錯」 「惑」 「繚」
 「れず」 「れ髪」 「寝れる」
 「れ箱」

※「丁」を部として含む文つ。

(11) 打 ダ チョウ う-つ

「手偏」の側に「丁」を置いた形の文です。「丁」は、クギを象ったもので、クギを打ちける様を表したのが、この文です。この「うつ」とは、つぐに打つ、まともに打ちけるという文です。あるいはでった棒などで「うつ」、ボールをバットで「うつ」、を「うつ」、電報を「うつ」、碁を「うつ」と用いられます。もうつ、ものをえる位、で組の「ダース」を、この文で表します。漢では、「(手偏)」と「(丁)」で表されます。

「楽」 「撃」 「診」
 「製」と磨製
 「(ちょうちょうはっし)」 「撲傷」
 「殴」 「強」 「た瀬網」 「ち解ける」
 「ち壊す」 「ちわせ」 「ち捨てる」
 「ちす」 「ちける」 「ってる」
 「ってけ」 「ち」 「ち」
 「ち」

「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎台」
 「𠄎𠄎箆」 「電𠄎𠄎」 「外𠄎𠄎」 「街𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」
 「提𠄎𠄎」 「窓に𠄎𠄎が𠄎𠄎る」

(14) 頂𠄎𠄎 チョウ いただき いただ-く

「丁𠄎𠄎」の𠄎𠄎側に「頁𠄎 (おおがい)」を置いた形の文𠄎𠄎です。「いただき」とは、頭の𠄎𠄎辺のことです。そこからものの最も𠄎𠄎いところという𠄎𠄎𠄎𠄎を表すようになりました。山の最も𠄎𠄎いところ、地位の最も𠄎𠄎いところと用いられて、第𠄎𠄎番𠄎𠄎の位を指すようになりました。また、頭の𠄎𠄎や最も𠄎𠄎いところにもものが置かれることを「いただく」と𠄎𠄎って、そこからものを「もらう」、𠄎𠄎かをして「もらう」、𠄎𠄎べ物を「𠄎𠄎べる」という𠄎𠄎𠄎𠄎の謙讓𠄎𠄎として用いられています。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (頁𠄎)」と「𠄎 (丁𠄎𠄎)」で表されます。𠄎𠄎𠄎𠄎とは𠄎𠄎𠄎𠄎が逆になっています。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎戴」 「山𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「富士山の𠄎𠄎𠄎𠄎に雪を𠄎𠄎く」

*「もらう、𠄎𠄎べる」という𠄎𠄎の「いただく」は、通常漢𠄎𠄎は用いずに、かな書きにします。

(15) 貯𠄎𠄎 チョ たくわ-える たくわ-え

「貝𠄎」の𠄎𠄎側に「ウ𠄎𠄎」の𠄎𠄎に「丁𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。𠄎𠄎側のつくり、「ウ𠄎𠄎」の𠄎𠄎に「丁𠄎𠄎」の形は、𠄎𠄎𠄎𠄎や武𠄎𠄎を蓄え納めておくための容𠄎𠄎を表します。𠄎𠄎側の偏の「貝𠄎」は、𠄎𠄎幣や𠄎𠄎産のことです。すなわちこの文𠄎𠄎は、𠄎𠄎𠄎𠄎を貯め込むことを𠄎𠄎𠄎𠄎します。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (貝𠄎)」と「𠄎 (丁𠄎𠄎)」で表されます。「ウ𠄎𠄎」は省略されます。

「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎池」 「𠄎𠄎𠄎場」 「𠄎𠄎蓄」
 「𠄎𠄎蔵」 「𠄎𠄎留」

“セ”を採りました。

「**成**」 「**功**」 「**長**」 「**立**」
「**育**」 「**熟**」
「**達**」 「**賛**」 「**構**」
「**形**」 「**平**」 「**り立ち**」 「**り**」
「**らぬ堪忍するが堪忍**」 「**り**」 「**り**」
「**り**」 「**り代わる**」 「**なりきん**」
「**山**」

* “なる”と訓読する文**成**が、これまでに**成**つ**成**ました。「**成**」は、“みのる”の**成**、穀物・野菜・**成**物など、作物が“なる”。「**成**」は、物**成**が**成**つの形を造ること、**成**が“なる”と用いられます。

(18) **誠** セイ ジョウ まこと まこと-に

「**言**偏」の**成**側に「**成**」が置かれた形の文**成**です。「**成**」は、お城の壁をとんとんと搗き**成**めてしっかりしたものを造ることを表します。それに「**言**偏」を**成**けて、うそでない、ごまかしでない、**成**な、**成**を込めたという**成**を表すのがこの文**成**です。訓の“まこと”は、「**成** (まこと)」に**成**する読みで、**成**当のこと、かけめのないこと、**成**実であることの**成**です。副詞的に“まことに…”と用いて、「**成**に、**成**変、全く」を**成**する用い**成**もされます。漢**成**では、「**成** (言偏)」と「**成** (成**成**)」で表されます。

「**成**実」 「**成**」 「**成**に**成**済みません」

* “まこと”の訓のある文**成**には、**成**に「**真**」が**成**て**成**ましたが、**成**的にはこの「**誠**」と**成**きな**成**違はありません。熟**成**や**成**用法に**成**違が**成**られますので、ご注**成**さい。また「**信**」の文**成**にも“まこと”という訓があります。多くは**成**名詞に用いられます。

(19) 城 じょう しろ き

「土偏」の側に「成」が置かれた形の文です。「成」は、「ほこ」と「丁」からた文で、お城の壁を堅くに造ることを表しています。それにさらに「土偏」をえて、「を」る城郭を表すのがこの文です。では、全を城壁でんで、敵の攻撃からっていました。またその城壁の外にも街は延びて、その外側にも壁が築かれてもいました。我がでは、「城」は堅な建築物で、敵の攻撃に備える塞を指しました。桃山・徳川代になると、戦の塞としてよりも、政治を司る核としての役割がクローズアップされてました。そのために、塞としての機よりも、権威と美的な価値にきを置かれた建築様式が採られるようになりました。漢では、「(土偏)」と「(成)」で表されます。

「郭」 「壁」 「」 「」
「白鷺」 「名屋のの鯨」 「」
「荒の」 「」 「カフカの」
「宮県」 「茨県」

・「戊」の側の内側に、縦に「一」と「口」がった形の文、「咸」を部として含む文つ。

*「咸」は、通常これだけでは用いられない文ですが、部としてには変々な文です。「一」と「口」は神様への祈りを表して、「戊」はそれをすることをしています。

「戊」は「ほこ」ではなく、後にて「まさかり」です。

(20) 感 かん

「戊」の側の内側に、縦に「一」と「口」がった形の文の「咸」の側に、「心」が置かれた形の文です。「カン」の音は、「咸」にしています。神様への祈りと、神様からの神託を感じるを表すとわれます。現では、身のりのや、のきを情報として受けめたり、や物や、様々な柄にするきだったり嫌いだったりという情感のきや、強くを

初めを決めて、順序よく記める、またその初めと順序。順序を追って書き記された歴書や記、我が国では、『書紀』を指します。「紀(ほんぎ)」とは、歴書の表記法で、その時代の物や、歴代の皇帝やその績と歴にスポットを当てる形式をいいます。その「紀」を巡る周辺の記述は、「(せい)か)、列」とって、諸侯や臣についての記録です。このような記述法を、(紀)と呼びます。またこの文は、支を巡る、をつとするの位として用いられます。さらに現代では「紀」とって、をつとするの位としてもちいられるのが一般的です。畿地の部の半島は、「紀伊半島」です。旧名では「紀州」と呼ばれます。この文の訓には、「いとぐち、はじめ、のり、おさめる、しるす」などがありますが、名以外には通常われません。漢では、「(糸偏)」と「(己)」で表されます。

「
 「
 「現代はにりました。」

(23) 記 キ コ しる - す

「言偏」の側に「己」が置かれた形の文です。「しるす」とは、頭のに留めておく、えておく、書き留めておく、メモをとる、忘れないように書き留めるといいうで、そこから文を書く、文章を書く、記録をとるといいうに用いられます。さらに、書き留められたもの、記述の文章、文書の束やその文・記号、文書を司る役などのに用いられます。我が国では、『記』の略称で、『記』とは、『記』と『書紀』を最の文献資料として呼称しています。漢では、「(言偏)」と「(己)」で表されます。

「憶」 「録」 「述」 「念」
 「号」 「載」 「」 「帳」
 「新者」 「新」 「」
 「暗」 「書」 「」 「銘」

れる、です、ます」などの助詞を総称して、「辞（じ）」と呼びます。漢字では、「舌（舌）」と「辛（辛）」で表されます。

「職」「任」「表」「令」
 「書」「辛」「表」
 「辛」「表」「令」
 「謝」「弔」
 「深くお儀をした。」

※「壬」を部として含む文。

・「任」とそれを部として含む文。

(26) 任 ニン まか-す まか-せる

「人偏」の側に「壬」が置かれた形の文です。「壬」は、胸の膨れた巻きを象った文、あるいは妊娠して腹の大きくなったを象った文とされます。この文の形は、手が大きな腹を抱える、あるいは大きな物を抱えることを表しています。“まかす、まかせる”とは、物をまかせること、物を引き受けることの文で、「壬」の形が、それを表しています。歴史的な名には、“トウ”という音がしばしば当てられます。漢字では、「人偏」と「壬」で表されます。「人偏」は、第偏が用いられています。

「務」「命」「地」「辛」
 「官」「責」「赴」「前」「後」

(27) 賃 チン やと-う

「任」の側に、「貝」が置かれた形の文です。「任」は“まかせる”、「貝」は、つまりお金のことです。この文は、お金を支払って仕事をさせる、仕事をさせる、仕事をさせる位にいて代価のお金を受け取るという文があります。「賃、賃賃、賃仕」と用いられます。そこから少し広がって、物や場所を、定期、定期の額で貸す、あるいは借りる、「賃、賃借」という用いられをし

ます。訓の“やとう”は、通常他の文「ヨ」が用いられて、この文「ヨ」は「ヨ」
 われませんが、漢「ヨ」では、「ヨ（貝）」と「ヨ（任）」で表され
 ます。「ヨ」が逆になっています。

「ヨ」 「ヨ借」 「ヨ料」 「ヨ仕ヨ」
 「ヨ貸し」 「ヨ貸マンション」 「ヨ」
 「ヨ」 「ヨ運」

*この「ヨ」の「ヨ」は、“ギン”と濁って読まれます。

♪♪♪ 愛ヨ歌 ♪♪♪

追 憶

作詞 ヨ吉雄
 スペインヨ謡

- 1 ヨ影やさしくまたたくみ空を
 仰ぎてさまよいヨ陰をヨけば
ヨうらのそよぎはヨいヨ誘いて
 澄みゆくヨにしのぼる昔
 ああ なつかしそのヨ

- 2 さざ波かそけくささやく岸辺を
 涼風うれしくさまよいヨけば
 くだくるヨ影ヨいヨ誘いて
 澄みゆくヨにしのぼる昔
 ああ なつかしそのヨ

※ スペインのヨメロディーにヨ吉雄が歌詞を
 つけたものです。ヨの歌詞の題名は“Flee as a Bird”
 （鳥のように逃げろ）で、内容は違うものです。

読みの練習 (21)

- (1) 広く言えば陽ももです。
- (2) をでは「ひしゃく」とった。
- (3) は宵のです。
- (4) はよくをかぶる。
- (5) でをむ。
- (6) ここはり住まいでして。
- (7) にそうになったとしても助けるよ。
- (8) 傾斜が急なを急という。
- (9) 神淡路震災。
- (10) 寿司はし寿司です。

- (11) 校には黒とチョークがでしたが…。
- (12) のに座ったら足がしびれた。
- (13) キャンプでごう炊さんをしたよ。
- (14) 麦はにいのだ。
- (15) 盛山といえ、白虎隊って知ってる？
- (16) 呼びかけてもがない！
- (17) せてはす波の音。
- (18) らぬをいこす。
- (19) 江代のがある。
- (20) 抛を収する。

- (21) に物を隠す。
- (22) しはしっかりさえることが。
- (23) を招いたのはこのです。
- (24) あのの声にがれる。
- (25) 全、足並みをさず歩く。
- (26) 現状を破しなければ…。
- (27) 彼らをちかす。
- (28) 地公共の。
- (29) 長の選挙。
- (30) 街が自的につく。

- (31) 爪に 爪を 爪す。
- (32) 爪を「ともしび」と読みます。
- (33) 山で 光を 爪む。
- (34) 長になって きたいのですが…。
- (35) 上げてご承知 きたく お願いします。
- (36) 爪を 爪い 尽くして しまった…。
- (37) お爪を 爪えて おこうよ。
- (38) 省 ばかり 作っても…。
- (39) 実験 功！
- (40) ついに 満願 就！
- (41) せば する さねばならぬ も。
- (42) 、彼は 尽く しましたよ。
- (43) うそから した。
- (44) に っ て ありがたい。
- (45) 壁を よじ 登る 忍者。
- (46) 跡 しろあと を 巡る。
- (47) これには 激 しました。
- (48) 敏 な です ねえ。
- (49) 夏は 欲 です。
- (50) 腹が っ て は 戦が できぬ。
- (51) を らす リストラ。
- (52) 前の 々。
- (53) 憶に ないので 録を した。
- (54) 工式を 無 に 終えた。
- (55) もう 自 で きられるよ、 を こそう。
- (56) 書と で を 調べる。
- (57) を めました。
- (58) 放 主義では 無責 です ね。
- (59) 情熱に 身を ず。
- (60) すべてを 妻に せる。
- (61) 運 表で 算する。
- (62) 貸し 住宅に 住む。

書き取り問題 (21)

- (1) わるいほしのもとにうまれたのかなあ。
- (2) ほっきよくせいをしめす。
- (3) 「みょうじょう」というぶんげいしがあった。
- (4) かそうたいかいにでたい。
- (5) さてはけびょうをつかったな。
- (6) かりぬいでなんとかまにあいそうだ。
- (7) かりにはいらなくてもしんぱいしないでね。
- (8) さかみちをすすむ。
- (9) はんしんちほうのことば。
- (10) おおさかはしょうにんのまちだ。

- (11) みなでふねのかんばんにいる。
- (12) このふるいいたをみろよ。
- (13) すいはんきがあたりまえのよですが…。
- (14) こめのめしさえあればなにもいらん。
- (15) いいやまのようにいえがついたとちをさがそう。
- (16) へんしんをおはやめに。
- (17) すぐにこたえをかえすひと。
- (18) てがみがなんかいだしてもかえってくるよ。
- (19) しゅっぱんしゃにほんをかえす。
- (20) おういんとはハンコをおすことです。

- (21) やまいをおしてはしりました。
- (22) てでおさえないとういてしまう。
- (23) たいこをらんだする。
- (24) じこでダイヤがみだれる。
- (25) あしなみをみだしたこどもたちが…。
- (26) だりつのあらそい。
- (27) ついあいてのからだをうってしまった。
- (28) まちのなかをふぼとあるく。
- (29) ちょうみんはさんせいですよ。
- (30) でんとうをけさないでね。

- (31) ひともしごろとはゆうがたのこと。
- (32) ちょうてんをかぞえる。
- (33) あちらのいえからいただきました。
- (34) もうたいしゅつさせていただくことに…。
- (35) ちょすいちにもみずがないぞ。
- (36) たくわえがそこをついた。
- (37) ちょうしゃのひとをしんようできるかい？
- (38) これはちかくせいりつするでしょう。
- (39) どうかじょうぶつしてください。
- (40) わざわいてんじてふくとなる。

- (41) むれをなすアユ。
- (42) あのひとはせいじつなかたです。
- (43) まことのことをおはなしします。
- (44) まことにりっぱなできばえです。
- (45) じょうかまちはえになる。
- (46) あのしろはまちのたからです。
- (47) かんじょうをあねにぶつける。
- (48) なんにでもかんじるころろがだいじです。
- (49) これからはじんこうがげんしょうしていく。
- (50) たいじゅうがへるのはびょうきですよ。

- (51) こうカロリーをへらす。
- (52) にじゅういつせいきがこんなとは…。
- (53) わたしのにつきをきねんにおくります。
- (54) きしょうじかんは、ろくじです。
- (55) はやおきできるまでわたしがおこしますよ。
- (56) しゅくじをきく。
- (57) かいしゃをやめる。
- (58) にんむをつらぬいた。
- (59) いもうとはきみにまかす。
- (60) やちんをもっていく。

- (61) まずちんぎんねあげがさきですよ。

8 複文 (4)

本章では、これまで基文、「第基文」(マシ漢文)、「漢文」・(漢文)、「較文」、「音文」と、それらを部として構される文「複文」をご紹介しましたが、そのにご紹介しなければならないもので、できなかった文と、部の組み立てとしてごにするのが困難な文を取り上げます。やや複雑にじられるかもしれませんが、漢文は変うまくできていますので、ずはそのままご理解下さい。

1. 紹し落とされたもの

(1) 映 エイ ヨウ うつ-す うつ-る は-える

「日偏」の側に「央」が置かれた形の文です。「うつす、うつる」とは、光と陰の境がくっきり際だって、色や輪郭がき彫りになることをします。また、スクリーンいっぱい映像が「映る」、美しい風景がに「映る」、にイメージが「映る」と用いられます。「はえる」とは、光が射して照り輝くことをして、「夕映え、映え、照り映える」と用いられます。「映画、映像、映写、映」と、現代の写・映像技術の用としても用いられています。また、刻を表すとしても用いられて、「(ひつじ)の刻」、現の午後として用いられました。漢文では、「(日 二チ)」と「(央 オウ)」で表されます。

「映画」 「映像」 「映写」 「映写」
 「映写」 「映え」 「夕映え」 「映え」

(2) 革 カク かわ あらた-める あらた-まる

「廿」の側に「十」、その「十」の縦線の部の部に横長の「口」をねた形の文です。物の皮を剥いで、ぴんと張ってにちつけた形を象っているとわれます。「かわ」とは、革で作られた衣料やなどとして、に用いられるものをいいます。このような製されたものを「皮革」と呼びます。「あらためる、あらたまる」とは、剥いだ獣の皮をぴんと張って弛みをなくす、いものを取り

除いて綺麗にする、その皮が^革の衣^住や交通や、狩りや戦いの^王に変わって^くことから^{した}訓読です。「革新」とは、制度や^法を新しくすること、「革命」とは、^くでは、その^の王^がが^違ったことをしたときに、^の命によって、新しい^{しい}王^ががそれに代わることを^いました。現代では、「フランス革命、ロシア革命」のように、政治や制度の担い^がが変わることや、「産業革命、流通革命、通^革革命」のように、^や経済が急速に変^{する}ことにも用いられます。「改革」とは、急激でなく、穏やかな変^をを、「沿革」とは、ものごとの移り変わり、ものの歴^ののことです。漢^{では}、「[（]廿[）]」と「[（]十[）]」で表されます。「口[」]は省略されます。

「^新」 「^命」 「改[」] 「沿[」] 「皮[」]

(3) 揮^キ ふる - う

「手^偏」の^側に「軍[」]が置かれた形の文[」]です。「軍[」]は^士が^をを取り^{んで}む形を象っていて、^隊が戦いに向かうことを表しています。それに「手[」]を^をえて、^をきく^{して}隊の統率を執るという^をを表します。「ふるう」とは、^をし切って物^に当たること、「腕を揮う、筆を揮う」などと用います。また^ををぐるっと^{して}図を^る、^ををぐるっと^{して}払い除けるという^をを表します。「キ」の音読を含む熟^{では}、「揮[」]とは、液^が常温で蒸^{して}気^に変わること、「揮[」]とは揮^の、「ガソリン」のことです。「揮[」]はガソリンに^せられた^で、自^の料として^に費されるところから^{される}費[」]です。「揮筆」は筆を揮うこと、筆を揮って^をを描いたり文[」]を書いたりすることです。「揮[」]とは、その^がっている^やその^の格を^にし切ることで、「^を揮して……、あなたの^柄を^揮すれば……」などと用いられます。「指揮」とは、^の集^をを組織にまとめて、^の的を^たすために指図をすることです。^隊の「指揮官」は、戦^をを^利に運ぶために^士の役割を決めたり、作戦を立てたりします。^士はその取り決めに従います。役^やの「指揮^統」は、その組織の^的を^たすための、情報や命令を^達する仕組みです。音楽の楽^やの「指揮者」は、その作^ををよりよく^{する}ために取りまとめる^で、^にっているのは「指揮棒」です。漢^{では}、「[（]手^偏）」と「[（]軍[」]」

で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎筆」 「𠄎𠄎𠄎」 「指𠄎𠄎官」
「指𠄎𠄎𠄎統」

* “ふるう” という訓読の文𠄎𠄎は他にもあります。どの文𠄎𠄎を𠄎𠄎用するかは、文章の内容によって違って𠄎𠄎ます。

(4) 禁𠄎𠄎 キン コン

ふさ-ぐ とど-める いさ-める いまし-め

「林𠄎𠄎」の𠄎𠄎に「示𠄎」が置かれた形の文𠄎𠄎です。この文𠄎𠄎の「示𠄎」は祭壇を表す象形文𠄎𠄎で、「林𠄎𠄎」はその周りを樹𠄎で𠄎𠄎ていることを表しています。つまり、神聖な神様の領域を妄りに侵されないように、樹𠄎で𠄎𠄎んで𠄎𠄎ていることを𠄎𠄎𠄎𠄎します。“キン”という音は、“キンじる”と𠄎𠄎用して、「…をしてはいけない」と用いられます。この文𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎𠄎に立ち𠄎𠄎れば、神様の領域に踏み𠄎𠄎てはいけないと、𠄎𠄎めているのです。そこで“ふさぐ、とどめる”という訓読が𠄎𠄎𠄎𠄎しました。それに従って、“いましめ、おきて”という𠄎𠄎𠄎𠄎を含んだ用いられ𠄎がされます。「禁忌」とは、ここまでしかやってはいけない、これ以𠄎𠄎やっけてはいけないと、枠をはめることを𠄎𠄎𠄎𠄎し、「禁じ得ない」と用いれば、我慢できない、やらない𠄎がよいがやってしまうという𠄎𠄎𠄎𠄎になります。さらに、𠄎の𠄎𠄎𠄎𠄎りを禁ずることから、「禁𠄎𠄎、禁裏」と、「皇居」あるいは「宮𠄎𠄎」を表す𠄎にも用いられます。また、𠄎を𠄎𠄎室に𠄎𠄎じ込めることから、「牢獄」を指す𠄎でもあります。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (林𠄎𠄎 はやし)」と「𠄎 (示𠄎 しめす)」で表されます。

「𠄎𠄎裏」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」
「𠄎𠄎句」 「𠄎𠄎獵」 「𠄎𠄎」 「𠄎𠄎じ技」
「𠄎𠄎じ𠄎」

(5) 筋𠄎𠄎 キン すじ

「竹𠄎冠𠄎𠄎」の𠄎𠄎に、𠄎𠄎に「肉月𠄎」、𠄎𠄎に「力𠄎」が置かれた形の文𠄎𠄎です。「竹𠄎冠𠄎𠄎」と「肉月𠄎」と「力𠄎」とで、力の𠄎𠄎って盛り𠄎𠄎がった𠄎が象られています。“すじ”とは筋𠄎のことで、𠄎𠄎の𠄎𠄎

で筋を束ねる器官です。また、長く繋がりになっているもの、長く長く伸びているもの、線（ライン）の筋にも用いられて、植物の繊維も“すじ”と呼ばれます。「鼻筋」は、鼻の線が通っている美のすっきりした容貌を褒めるです。「青筋」は怒りで顔に血管が浮いて見えること、「筋が浮いて見える」という表現は、顔の静脈が青く筋張って見えることです。「筋、川筋」とは、顔や川に沿っているところ、「海筋、利川筋」のように用いられます。

「筋」とは筋の線の筋で、「筋の光、筋の筋」と用いられます。「筋筋」とは筋の筋のこと、「筋途」の筋にも用いられて、同じ筋で「…筋」とも用いられます。「筋縄ではかない」とは、普通の法ではうまくかないという筋です。「筋」は股掛けること、「筋」は筋の弦で奏でる楽、「筋線」のことです。また“すじ”には、血統、筋、「筋がよい、よい筋」や、物の理、条理、「筋が通っている、筋が違う」という表現にも用いられます。「筋」は、柄のよいことと、理に従うことという、筋の筋に用いられる筋です。さらに素筋、筋、「筋がよい、筋がよい」、物、筋などの骨組み、「粗筋、筋書き」、繋がりのある筋、筋のあるものなどとぼかした筋し、「その筋の…、確かな筋」などと用いられます。「筋」は、筋のひらに現れる線のことですが、筋段や筋を指す筋として、碁や将棋の局筋における差し筋を筋ったり、取引用筋としての売り筋と買い筋のことを筋たりします。「筋違い」は、筋が引きつって強く痛むことと、筋理に筋われないことの筋の筋に用いられます。「筋向かい」とは斜向かいのことで、斜めに向き筋った状筋をいい、「筋交い」は斜交いのことで、斜めに交わった状筋です。今では建物の柱や梁に斜めに渡した柱のことを筋います。「キン」の音読は専ら「筋」の筋です。「…筋」と筋用して、筋の筋格、たとえば横紋筋、平滑筋、筋などや、名称、たとえば筋腿筋頭筋、筋腕筋頭筋などに用いられます。「筋」は、筋の至る筋にあつて、筋らかの筋きに筋わっています。とりわけ「骨格筋」は、筋の骨組みである骨格に筋着して、骨と骨との繋ぎ筋の筋節を筋かしたり筋定したりします。「鉄筋」はコンクリートの建築物を支える鉄の棒のことです。漢筋では、「筋（竹冠筋）」と「筋（肉筋）」で表されます。「力筋」は省略されます。

「筋筋筋」 「横紋筋筋」 「平滑筋筋」 「筋筋筋」
 「骨格筋筋」 「内臓筋筋」 「筋筋筋筋筋頭筋筋」

「腿頭」「腕頭」「違い」
「向かい」「交い」「鼻」「青」
「がいてえる」「川」
「海」「利川」「」
「の光」「の」「」
「縄ではかない」「」
「血がよい」「よい」「が通っている」
「が違う」「」「がよい」
「が」「粗」「書き」
「そのの…」 「確かな」「」

*この文のの部の「肋」は、「ロク、あばら」という文です。漢では「」と書きます。

※「形」と「研」

(6) 形 ケイ ギョウ かたち かた

側の偏に、「一」のに「廿」ののいた形の「脚」、側のつくり「づくり」を置いた形の文です。偏は、刃物でものの形を整えることを表していると言われて、側のつくりの「づくり」は、ものの周りを布切れで綺麗に飾ることを表しています。「かたち、かた」とは、外へ現れた姿、ものの外枠、ものの外枠を決める基、ものの実物、ものそのもののです。またのにして身指します。さらに「かたどる」や「あらわれる」という訓読もあって、ものの形を「写し取る」とか、「外に現れた姿」というを含んでいます。「形式」とは、外から見た形のこと、内容とされます。「形」とは、そのものの形、「形」とは、そのものの表す形やを指します。「形骸」とは、形だけの、身の抜けたこと、「形」とは、物のに引き継がれる形を指します。「形」は、やをに、に似せて象ったものです。くは「ひとがた」と呼ばれて、教に用いられました。以降「にんぎょう」と呼ばれて、観賞用や愛玩用に用いられるようになりました。文法の「形容詞」とは、象の格やを表すを指します。漢では、「」と「」（づく

り)」で表されます。「𠄎」は、「ケイ、ケン」の音を表す部𠄎𠄎で、「一𠄎」と「𠄎𠄎𠄎脚」でできています。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎式」 「𠄎𠄎而𠄎𠄎𠄎」
「𠄎𠄎骸」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「象𠄎𠄎文𠄎𠄎」
「𠄎𠄎声文𠄎𠄎」 「𠄎𠄎容詞」 「𠄎𠄎角𠄎𠄎と𠄎𠄎角𠄎𠄎」
「𠄎𠄎𠄎𠄎と球𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎け」
「顔𠄎𠄎」 「山𠄎𠄎𠄎」

(7) 研𠄎𠄎𠄎 ケン ゲン みが-く と-ぐ

「石𠄎𠄎偏」の𠄎𠄎側「形𠄎𠄎𠄎」の偏の「一𠄎𠄎」の𠄎𠄎に「𠄎𠄎𠄎𠄎脚」を置いた𠄎𠄎の文𠄎𠄎𠄎です。この文𠄎𠄎𠄎のつくりは、刃物でものの𠄎𠄎を整えることを表します。この文𠄎𠄎𠄎では𠄎𠄎側の𠄎𠄎偏が𠄎𠄎くことで、𠄎𠄎を𠄎𠄎って𠄎𠄎を整えることを表して、「みがく」とは、硬いもので擦って汚れを落とすこと、𠄎𠄎や砂で強く擦って、𠄎𠄎𠄎𠄎を取り除いて光𠄎𠄎𠄎を𠄎𠄎たせることを𠄎𠄎います。「とぐ」とは、𠄎𠄎や𠄎𠄎属をさらに磨いて薄く鋭くして、刃を𠄎𠄎けてものを切ったり刺したりできるようにすることです。この文𠄎𠄎𠄎は、このようにものを磨いたり刃を研いだりすることから、𠄎𠄎を研ぎ澄ます、考えや𠄎𠄎𠄎𠄎を突き詰めることを表して、物𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎𠄎を𠄎𠄎極めることにも用いられます。「研削」とは、砥𠄎𠄎でものの表𠄎𠄎𠄎を磨いて削り取ること、「研磨」とは、ものを磨くこと、また技術や𠄎𠄎を鍛えることをも指します。「研𠄎𠄎」や「研修」とは、𠄎𠄎𠄎𠄎や技術を突き詰めること、職業に𠄎𠄎𠄎𠄎な𠄎𠄎柄を𠄎𠄎習すること、「研鑽」とは、研𠄎𠄎し𠄎𠄎習して、物𠄎𠄎𠄎や𠄎𠄎柄の𠄎𠄎𠄎𠄎を𠄎𠄎めることを𠄎𠄎います。また𠄎𠄎この文𠄎𠄎𠄎は、𠄎𠄎の「すずり」で墨をするという𠄎𠄎𠄎𠄎で、「する」という訓読もあります。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎 (𠄎𠄎偏)」と「𠄎𠄎」で表されます。「𠄎𠄎」の𠄎𠄎𠄎𠄎符号は「一𠄎𠄎」と「𠄎𠄎𠄎𠄎脚」で、「形𠄎𠄎𠄎」の偏と同じです。

「𠄎𠄎𠄎磨」 「𠄎𠄎𠄎削」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎鑽」
「𠄎𠄎𠄎修」 「刃物を𠄎𠄎𠄎ぐ」 「お米を𠄎𠄎𠄎ぐ」
「𠄎𠄎を𠄎𠄎𠄎ぎ澄ます」

* 「形𠄎𠄎𠄎」と「研𠄎𠄎𠄎」のご紹𠄎𠄎𠄎でした。

りを「𠄎」すること、神様を「𠄎」にすることで、そのようにして「𠄎」族や「𠄎」族を「𠄎」することを表しています。「あ、われ、あが」とは、第「𠄎」称の代名詞、自「𠄎」のことを指します。神様を「𠄎」るのが「われ」という「𠄎」です。「吾（ごじん）」とは、「われわれ、𠄎」の漢「𠄎」的な表現です。「吾（あこ、わこ）」とは、「わがこ」の「𠄎」で、現「𠄎」でも短歌などではしばしば用いられます。またこの文「𠄎」は、「𠄎」に「𠄎」て「𠄎」た文「𠄎」にも部「𠄎」として含まれています。「語」は、「言偏」の「𠄎」側にこの「吾」が置かれた「𠄎」の文「𠄎」で、「かたる」と訓読して、「𠄎」を表す文「𠄎」です。「𠄎」という場「𠄎」の「言」は、積極的な「𠄎」、攻撃的な「𠄎」を「𠄎」し、「語」は、自「𠄎」自身や「𠄎」族を「𠄎」するための「𠄎」をしています。漢「𠄎」では、「𠄎（五）」と「𠄎（口）」で表されます。

「𠄎」 「𠄎」

※「孔」とこれに「𠄎」した文「𠄎」つ。

(10) 孔 コウ ク あな

「子」の「𠄎」側に、アルファベットの「J」の向きを「𠄎」にしたものを置いた「𠄎」の文「𠄎」です。「𠄎」側の「子」は赤ちゃんを象った「𠄎」、𠄎」側の「J」の向きを「𠄎」にしたものは、赤ちゃんの頭をその「𠄎」に剃ったものと「𠄎」われます。この文「𠄎」の原義は、赤ちゃんに健やかに育て欲しいという祈りです。「あな」という訓読は、「𠄎」の「𠄎」にはありませんが、現「𠄎」はその「𠄎」に用いられています。「あな」とは、「𠄎」が空洞になっているところ、突き通されたところの「𠄎」です。用いられ「𠄎」は「壁などに空けられた「𠄎」、ものの「𠄎」りするところ」として、「口」のそれと「𠄎」なります。解剖「𠄎」では、「𠄎」の「𠄎」にある「あな」を指す場「𠄎」にはこの文「𠄎」が当てられて、「𠄎」液などが「𠄎」りする「口」と区別されています。「𠄎」穿孔」のように、「𠄎」気で「𠄎」の「𠄎」に「𠄎」が空く場「𠄎」にも、この文「𠄎」が当てられます。またこの文「𠄎」は、鳥の「孔雀」の「𠄎」もあって、美しい羽を「𠄎」つことから、「𠄎」変珍「𠄎」されました。さらにこの文「𠄎」は、「𠄎」代の「𠄎」「孔」を指していて、その「𠄎」録は「論」として今「𠄎」まで「𠄎」えられています。この「孔」の「子」は、「𠄎」の「𠄎」です。漢「𠄎」では、

「𠂔 (子 𠂔 シ)」と「𠂔」で表されます。この「𠂔」は、「𠂔」の向きを 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔にした 𠂔 𠂔を表しています。𠂔 𠂔にご紹 𠂔 𠂔した「乱 𠂔 𠂔」の「𠂔」と同様です。ただし、「乱 𠂔 𠂔」の「𠂔」は、「乙 𠂔 𠂔」に 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔していますが、ここでは「乙 𠂔 𠂔」の 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔はありません。

「𠂔 𠂔 𠂔」 「𠂔 𠂔雀」 「𠂔 𠂔穿 𠂔 𠂔」

* “あな”と訓読する文 𠂔 𠂔には、𠂔 𠂔にご紹 𠂔 𠂔した「穴 𠂔 𠂔」があります。𠂔 𠂔般に“あな”と訓読する場 𠂔 𠂔は「穴 𠂔 𠂔」が用いられて、この「孔 𠂔 𠂔」の 𠂔 𠂔用は極めて 𠂔 𠂔られています。それぞれの項をご 𠂔 𠂔照 𠂔 𠂔さい。

(11) 乳 𠂔 𠂔 ニュウ チ チ

「孔 𠂔 𠂔」の 𠂔 𠂔側の「子 𠂔」の 𠂔 𠂔に、カタカナの「ノ」と「ツ」を置いた 𠂔 𠂔の文 𠂔 𠂔です。カタカナの「ノ」と「ツ」は、𠂔 𠂔で 𠂔 𠂔供を抱き抱えて 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔に育てることを表していて、この文 𠂔 𠂔は、「孔 𠂔 𠂔」の 𠂔 𠂔つ「𠂔 𠂔供を育む」という 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔と、「ノ」と「ツ」で表される 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔の 𠂔 𠂔つが 𠂔 𠂔なって、𠂔 𠂔供に乳を与えて 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔に育てるという 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔を表しています。そこからさらに、“ちち”の 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔が 𠂔 𠂔じて、𠂔 𠂔供の 𠂔物である“ち、ちち”の訓読が 𠂔 𠂔立しました。この「ノ」と「ツ」の 𠂔 𠂔に「子 𠂔」の 𠂔 𠂔は、𠂔 𠂔にご紹 𠂔 𠂔した「浮 𠂔 𠂔」の旁と同じ 𠂔 𠂔で、同様に 𠂔 𠂔供を包んで育てる、卵を温めて育てるという 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔を表しています。漢 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔では、「𠂔 (ち)」と「𠂔 (孔 𠂔 𠂔 コウ)」で表されます。「𠂔」は、“ち、ちち”の訓から採りました。

「𠂔 𠂔児」 「𠂔 𠂔牛」 「𠂔 𠂔製 𠂔 𠂔」 「𠂔 𠂔 𠂔 𠂔」
 「牛 𠂔 𠂔」 「𠂔 𠂔飲 𠂔 𠂔」 「𠂔 𠂔 𠂔 𠂔」

* 「孔 𠂔 𠂔」とそれに 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔する文 𠂔 𠂔のご紹 𠂔 𠂔でした。

※「祭」ノとそれを含む文ノ。

(12) 祭ノ サイ まつ-る まつり

側ノにカタカナの「タ」のノがノつあると、側ノにカタカナの「マ」のノが置かれて、そのノに「示」ノが置かれた文ノです。ノのノつ多いカタカナの「タ」は、「然」ノの場ノと同様に、「肉」ノを表しています。またカタカナの「マ」のノは、「手」ノです。「示」ノは、神様への捧げ物を供える祭壇を象った文ノです。ノい換えればこの文ノは、祭壇である「示」ノのノに、供物であるノをノで捧げノっているノを表しています。「まつる、まつり」とは、神様に供え物をして、祈りを捧げること、そして神様からの声を聴いて、それに従ってノをノうというノです。我がノでは、作物の豊作や、漁獵の豊漁、ノ業の隆盛を祈念した祭りが、ノ節の節ノにノわれて、地ノ地ノの神ノは、ノ々で賑わいました。ノのノはついこの前まで、農業ノ産に支えられていました。自ノのノと恵みへの畏怖と敬ノは、ノ々のノの奥深くに、現ノもあるはずですが、当てられる漢ノは異なりますが、「まつりごと」は「政治」のこと、「たてまつる」は「差しノげる」、またノ詞のノ尾にノけて献ノのノを表しますが、この「まつる」とノ源を同じくしています。ノいノに「まつろう」がありますが、「従う、服従する」というノです。これもノ源を同じくしています。漢ノでは、「示ノ しめす」と「ノ (さ)」で表されます。「さ」は、「サイ」の音から採りました。

「ノ壇」 「ノ儀」 「ノ式」 「ノ」
 「新嘗ノ」 「ノ育ノ」 「文ノ」 「司ノ」
 「ノり」

(13) 際ノ サイ きわ

「こざと偏」の側ノに「祭」ノが置かれた文ノです。「こざと偏」は、神様との通路、地ノとノを結ぶノ段を表します。「祭」ノはノ壇に供え物を捧げているノ、ノ壇を清めることをノします。この文ノは、神様の声を聴く、神様と交渉をノつというノを表しています。「きわ」とは、ノ接する境ノのノで、「際」とは、陸とノとが触れノう境ノのことです。さらにその境ノで触れノって、交渉を

「交際」とは人と人の交わり、「交際」とは人と人の交わりのことです。「実際」とは、物事の触れ合いの実際、「交際」とは、人と交渉を交わすときのこちらの領域を指します。また「その際、その場」の「際」で、「……の際」とも用いられます。「際物（きわもの）」とは、そのときでなければ売れないもの、物の松や物の雛など、また流しを迫ったものの「際」です。漢では、「際（こざと偏）」と「祭（まつり）」で表されます。

「交際」 「交際」 「実際」 「際」
 「際立つ」 「物」 「（みずぎわ）」
 「（まぎわ）」 「往（おうじょうぎわ）」

(14) 察（サツ） あき - らか

「ウ冠」の「冠」に「祭」が置かれた「冠祭」の文です。「祭」は、神様に捧げ物をする事、祭壇を清めることを表します。「ウ冠」は、屋に覆われたもの、建物の「冠」のことです。この文は、祭壇を備えた建物の「冠」を、隅々まで清めること、「冠」を光らせる、よく調べる、よく「冠」が利く、深く「冠」通す」という「冠」に用いられます。「洞察」とは、物事を「冠」抜くこと、「冠」抜く「冠」を指します。「観察」とは、ゆっくり「冠」をかけて調べる事、よく「冠」で調べ「冠」げることです。「察する」とは、「冠」いやりを「冠」って深く理解することです。またこの文は、「警察、検察、監察」と、「冠」の秩序を護り、防犯に努める役割を呼ぶ「冠」としても用いられます。漢では、「冠（ウ冠）」と「祭（まつり）」で表されます。

「冠知」 「観」 「洞」 「冠」
 「警」 「検」 「監」

*ここで「かんさつ」という「冠」が「冠」つ「冠」て「冠」ましたが、前者は「よく「冠」で調べる事」、後者は「監督し、「冠」らかにすること」の「冠」です。

*「あきらか」という訓読は、多くの文「冠」に当てられています。通常この文「冠」は用いられません。

*以「冠」「祭」とそれを含む「際」「察」のご紹「冠」でした。

(15) 算 算 サン ソン かぞ-える

「竹冠」の「目」、その「目」に「廿」の「目」の「目」いた「目」（「目」脚）が置かれた「目」の文「目」です。「竹冠」の「目」の部「目」は、「目」は「目」だったのですが、筆の運びからこのような「目」になりました。この文「目」は、「目」を「目」く切ったものの「目」を表して、それを「目」って「目」算をすることを「目」しています。「算」（さんぎ）とは、筮（ぜいちく）とともに易（えき）の占いに「目」用した、「目」柱の「目」の棒です。またこれに似た「目」の棒は、「目」でも我が「目」でも、「目」の「目」算に用いられました。これも「算」と呼ばれます。漢「目」では、「目」（目 モク）と「目」（「目」脚）で表されます。「竹冠」を省略して、「目」の「目」の「目」ではなく、「目」た「目」の「目」に沿って構「目」されています。

「目」 「目」術 「目」盤（そろばん） 「目」
 「目」 「目」 「目」取り 「目」
 「目」げ 「目」

* “かぞえる” という訓読には、通常この文「目」は用いられません。「数」がそれに当てられます。

(16) 実 実 ジツ み みの-る

「ウ冠」の「目」に漢「目」の「三」と「人」を「目」ねたものが置かれた「目」の文「目」です。「ウ冠」の「目」のものは「春」の「目」に「目」るものと同じ「目」ですが、「春」では「目」が芽「目」えて、「目」に向かって「目」長する姿を象ったものです。この文「目」では、植物が「目」長し、栄養とエネルギーを蓄えて、実を結ぶ姿を象っています。「目」の実や作物が実って、しっかり充実した実を「目」けるという「目」を表しています。旧「目」では、「ウ冠」の「目」に「貫」（カン）の文「目」が「目」っています。“ジツ”と読んで、「目」身がしっかり詰まっている、内容があって空虚でない、嘘「目」でなく「目」当のことである、「目」実であるなどの「目」を表します。“み”と読んで、作物や「目」実の実、「目」に詰まっているもの、容「目」に「目」して「目」に「目」っているもの、“みのる”とは、作物や「目」実が実ることから、「目」業が「目」を結ぶ、努「目」が報われるなどの「目」に用いられます。「実に」とは、「目」に、「目」当に」の「目」を、「その実」とは、

「𠄎𠄎当は、実𠄎𠄎は」の𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。
 漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (ウ冠𠄎𠄎)」と「𠄎」で
 表されます。「𠄎」は、この文𠄎𠄎の旧𠄎𠄎に含まれ
 る「貫𠄎𠄎 (カン)」の𠄎𠄎に、「母𠄎𠄎 (はは)」に
 似た文𠄎𠄎が含まれているところから採られました。

旧字
「實」

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎情」 「𠄎𠄎印」
 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎と𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「現𠄎𠄎」
 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」
 「虚𠄎𠄎」

(17) 捨𠄎𠄎 シャ す-てる

「手𠄎𠄎偏」の𠄎𠄎側に「舍𠄎𠄎」が置かれた𠄎𠄎の文𠄎𠄎です。「舍𠄎𠄎」
 は、ゆったりと身𠄎𠄎を伸ばして𠄎𠄎むところという𠄎𠄎𠄎𠄎で、それに𠄎
 偏を𠄎𠄎えて、𠄎の𠄎を緩めて放すこと、𠄎を抜いて放って置くことを表し
 ます。「すてる」とは、𠄎に𠄎𠄎ったものを放すこと、不𠄎𠄎なものとして
 放り𠄎𠄎すこと、考えることをやめて諦めることです。「シャ」の音読では、
 「取捨」と用いて、𠄎𠄎𠄎𠄎なものを取って不𠄎𠄎なものを捨てる、「取捨選
 択」とは、𠄎𠄎𠄎𠄎なもの和不𠄎𠄎なものを選んで取り𠄎𠄎けることです。
 「𠄎𠄎捨𠄎𠄎𠄎𠄎」とは、端𠄎の初桁の𠄎𠄎から𠄎𠄎を切り捨てて、𠄎𠄎から
 𠄎𠄎を切り𠄎𠄎げることです。また「シャ」は施しをすることを指して、「喜
 捨」とは、神𠄎𠄎やお𠄎𠄎に喜んで𠄎𠄎𠄎𠄎するという𠄎𠄎𠄎𠄎で
 す。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (手𠄎)」と「𠄎 (舍𠄎𠄎)」で表されます。

「取𠄎𠄎」 「𠄎𠄎て印」 「𠄎𠄎て置く」 「𠄎𠄎て𠄎」
 「𠄎𠄎て去る」 「𠄎𠄎て台詞」 「𠄎𠄎て𠄎𠄎」 「𠄎𠄎て鉢」

(18) 洗𠄎𠄎 セン あら-う

「さんずい」の𠄎𠄎側に「先𠄎𠄎」が置かれた𠄎𠄎の文𠄎𠄎です。「先𠄎𠄎」
 は𠄎の足の爪𠄎𠄎を象っていて、これに「さんずい」を𠄎𠄎けて、𠄎で足の
 指𠄎𠄎を洗う様𠄎を表しています。「あらう」とは、𠄎で汚れを流し去る、

とです。「箱寿司」は、寿司の^①に魚介類を^②せて、箱に詰めて押しをして作る^③し寿司です。このように「箱…」と箱を頭に^④けると、^⑤角いものや箱^⑥のもの、あるいは物を満たすことを指す^⑦として^⑧用されます。また「…箱」と箱を後ろに^⑨けると、その箱の^⑩や状^⑪や用途を表します。「^⑫箱、^⑬箱」は^⑭製の箱、^⑮製の箱、「空き箱」は空の箱、「^⑯箱」は^⑰さい箱、「^⑱り箱」は^⑲や^⑳を^㉑り^㉒げて作った箱で、菓^㉓や料理を^㉔れます。「茶箱」はお茶の^㉕を^㉖れる箱、「衣装箱」は衣服をしまう箱、「^㉗駄箱」は履き物を^㉘れる箱、「硯箱」は硯と筆と墨を^㉙れた箱です。「^㉚箱」は指輪やネックレスなどの^㉛をしまう箱、「^㉜れ箱」は衣装や^㉝物を^㉞れる箱です。「^㉟箱」はお^㊱を^㊲える箱、「^㊳書箱」は郵^㊴物を受け取るために、郵^㊵局に設置されている箱です。「^㊶箱」は、料理を^㊷れた容^㊸が^㊹段かに^㊺ねられたものです。^㊻文^㊼の熟^㊽の読みは、普通^㊾つとも音読するか訓読するかします。この「^㊿箱」は、「^㊽」を“ジュウ”（音読）、「箱」を“はこ”（訓読）、すなわち^㊾を音読、後を訓読しています。このような読み^㊿を「^㊿箱読み」と呼びます。^㊿は多くありませんが、注^㊿が^㊿です。漢^㊿では、「^㊿（竹^㊿冠^㊿）」と「^㊿（相^㊿）」で表されます。

「^㊿」 「^㊿り^㊿」 「^㊿り^㊿」
「^㊿書き」 「^㊿船」 「^㊿庭」 「^㊿詰め」
「^㊿寿司」 「^㊿」 「^㊿」 「^㊿肴」
「^㊿膳」 「^㊿段」 「^㊿梯」 「^㊿提^㊿」
「^㊿授」 「^㊿樋」 「^㊿」 「^㊿」
「^㊿」 「^㊿」 「^㊿」 「^㊿り^㊿」
「菓^㊿」 「^㊿当^㊿」 「茶^㊿」 「^㊿装^㊿」
「^㊿粧^㊿」 「^㊿れ^㊿」 「硯^㊿」 「^㊿」
「^㊿」 「^㊿」 「^㊿書^㊿」 「^㊿銭^㊿」
「^㊿」 「^㊿急^㊿」 「^㊿」 「^㊿縫^㊿」
「菓^㊿」 「^㊿び^㊿」 「^㊿駄^㊿」 「^㊿読み」

* “はこ”と訓読する文^㊿は他にもあります。ご注^㊿さい。

(20) 批 比 ヒ う-つ ふ-れる

「手偏」の側に「比」が置かれたの文です。「突きわけて」というのがこの文の訓読です。つくりの「比」が音とをを表しています。「うつ、ふれる」の訓読は、そのものに触れて善ししを決める、較し吟して評価することです。「批判」とは、物の善ししについて、評価し判定することです。普通否定的に用いられますが、の訓読は、否定的にも肯定的にも評価することです。「批評」とは、突きわけて論じて評価を決めることです。「文批評、音楽批評、美術批評、経済批評」などと用いられます。「批評」とはそのように批評をするをいますが、しばしば否定的に用いられます。「批評」とは、批評をするです。「批准」とは、と、あるいは的的な条を、そのの主権者（現ではですが）が承認することです。我がでは全権代表（普通総理大臣です）が外と交わした束を、が承認することで「批准」が立します。漢では、「（手偏）」と「（比）」で表されます。

「判」 「評」 「准」

(21) 弁 ベン わきま-える わか-つ かんむり

カタカナの「ム」のに「廿」ののいた（脚）が置かれたの文です。「かんむり」とは、この文が、角の布でできたを象っているところからの訓読です。「弁官」とって、代の官職の象徴となっていました。代の礼装には、このが欠かせませんでした。「わかつ、わきまえる」とは、やはりこの文が、刃物で切りける様を象っているところからじた訓読です。「ものごとをよく知る、けて整える、整理してする、しいことと誤っていることとを区別する」というを表します。「弁別」とは、類・整理して提すること、「弁理」とは、けて処理することです。さらに、ものをう、をするというで、「弁が立つ」とは、筋の立ったができること、けて・揃えて・整理して、ききの納得できるのできることです。「弁」とは、の仕・め、「弁護」とは、をすることで、疑いを晴らすべく護ること、「弁論」とは、あるテーマに沿って、筋の通ったを述べることをいます。「弁」とは、自らをらかにして、降りかかった疑念を払拭すること、「弁償」とは、過ちなどを償

「訪」とは、用件を尋ねて訪ねて、訪ねたり訪ねられるのを訪ねたりすることです。「訪米」とは、日本から訪米することです。漢文にこの文を前置すると、その訪米の名の漢文にこの文を前置すると、その訪米を訪ねるといふ漢文になります。「訪米（アメリカ）、訪英（イギリス）、訪日（日本）、訪韓（韓国）」。

「訪米」 「訪英」 「訪日」 「訪韓」
 「訪米」 「訪英」 「訪日」 「訪韓」

(23) 郵政 ユウ

「垂」の側に「おおざと」が置かれた漢文です。「垂」は外れの地域、辺境の地を表す漢文、「おおざと」は日本から離れた地のことを指す部です。すなわち日本から遠く離れた、境にいとこに々とある々のことです。この漢文は既に「駅」と同様の漢文で、「駅」は通や運にけるやの継の場、そこではを替えてを急ぎます、この漢文は、その漢文をするためにが留まっている漢文です。から地への令、その他のや物を届けるのがこの漢文の漢文で、の通・運輸の機にわる漢文です。「郵」とは、や物を次々と継しながら的の場に届けるサービスを、「郵政」とは、このようにしてや物をすること、「郵船」とは、そのようなサービスやの往を船でうこと、「郵政」とはそのようなサービスを、や自治が法律の枠組みを決めて制度を作って運用することをいいます。またこの漢文には「とが」という訓読もあって、を傷ける、傷をうという漢文に用いられます。漢文では、「（おおざと）」と「（垂）」で表されます。がになっています。

「郵政省」 「郵船」 「郵政省」 「郵船」
 「郵政省」 「郵船」 「郵政省」 「郵船」

♪♪♪♪ 愛 歌 ♪♪♪♪



文部省 歌

- 1 三三の鎮三三 (ちんじゅ) の 神様の
きょうはめでたい 御三三三 (おまつりび)
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
三三から三三こえる 笛三三鼓

- 2 三三も豊三三満作 (ほうねんまんさく) で
三三は総三三 (そうで) の 三三三三 (おおまつり)
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
夜まで賑 (にぎ) わう 宮の三三

- 3 稔 (みのり) の三三に 神様の
めぐみたたえる 三三三三
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
ドンドンヒャララ ドンヒャララ
三三いても三三が 勇み立つ

※ 三三番は戦後の歌詞です。戦前の歌詞では、
「治まる御代に 神様の / めぐみ仰ぐや 三三三三」
(以三三同じ) と歌われていました。

読みの練習 (22)

- (1) 画をみるとはすぐ読まれるのです。
 - (2) 光を注して光が光る。
 - (3) 着物に帯が帯えますこと。
 - (4) 改訂、改訂とありますが…。
 - (5) カッコイイジャンだねえ。
 - (6) 腕を注いでさい。
 - (7) 普段の注を読めば読めますですよ。
 - (8) ここは駐留の場です。
 - (9) かれは書き通りに読めてくれたようだ。
 - (10) 肉もりもりのマッチョな男。
-
- (11) 海からあらゆる命は読まれた。
 - (12) 注がまた読されている。
 - (13) もう影も帯もないんですよ。
 - (14) 洋服の帯が崩れてしまった。
 - (15) 修の講師を引き受けた。
 - (16) 注くお米を帯がないと…。
 - (17) 我が注の帯は幾つあるだろう。
 - (18) 注とはいい「我々」という注の注。
 - (19) 緑の帯っぱにある気帯。
 - (20) 鼻の帯を鼻帯ともいう。
-
- (21) 製帯を山帯べる。
 - (22) 産まれた物の帯どもがお注の帯より多いと帯変です。
 - (23) 帯に帯度の帯礼が始まる。
 - (24) 彼は帯り帯げておけばいいんだよ。
 - (25) 帯帯帯帯なくお帯がいる。
 - (26) 別れ帯にズバッと帯うんだもの…。
 - (27) しっかり観帯して帯帯帯を書くんですよ。
 - (28) 帯帯帯は最も帯帯帯でした。
 - (29) 帯帯帯、その帯帯帯はどうなっているのだい？
 - (30) 帯の帯帯はどれも帯帯帯帯きた。

- (14) ゆでたまごのかたをぬく。
- (15) けんきゅうかいにでる。
- (16) といしでほうちょうをとぐ。
- (17) けんみんホールはどこにありますか。
- (18) わこはあまりつかわれないことばだ。
- (19) はいすいこうがちいさすぎるんだよ。
- (20) こうしのしそんはいまでも、たすういるという。

- (21) ぎゅうにゆうからにゆうせいひんをつくる。
- (22) ちくびのかずはどうぶつによってちがう。
- (23) ぶんかさいでにぎやかです。
- (24) ひなまつりやはなまつり…すてがたいぎょうじです。
- (25) せんぞをまつる。
- (26) こくさいこうりゅうにはさんせいだ。
- (27) みずぎわさくせんでくいとめた。
- (28) あなたのおかんがえをさっしますと…。
- (29) じっかはあのかわのすぐそばです。
- (30) いまはかわをむきやすいかじつがすかれる。

- (31) みのりあるけんきゅうだね。
- (32) ここでししゃごにゆうします。
- (33) なんでもやたらにすててはいけない。
- (34) せんめんきにみずをくんで、かおとてをよくあらう。
- (35) おまいりのまえにてをあらってきよめます。
- (36) パンドラのはこをあけてしまった。
- (37) うらしまたろ うは、おみやげにたまてばこをもらった。
- (38) ごひひょうをたまわりたい。
- (39) さあ、おべんとうのじかんですよ。
- (40) わたくしはそんなこと、ちゃんとわきまえております。

- (41) らいほうしたのはなんとつるでした。
- (42) ちいさなゆうびんきょくだって、そのじもとはじゅうようですよ。

【附】 既習漢点字一覽

第一回

漢数字とその《近似文字》

- 1 一 二 三 四 五 六
 7 七 八 九 十 廿 百
 13 千 14 万 15 億 16 兆 * ○
 《亜 (一) 参 (三) 丸 (九)
 意 (億) 元 (兆)》

第一基本文字とその《近似文字》

- 1 目 2 糸 3 系 4 比 5 数 6 家 7 宿 8 学
 9 言 10 語 11 頁 12 貝 13 金 14 木 15 草
 16 犬 17 子 18 都 19 市 20 兂 21 食 22 馬
 23 田 24 竹 25 土 26 手 27 戸 28 人 29 仁
 30 水 31 氷 32 力 33 示 34 私 35 走 36 進
 37 火 38 女 39 玉 40 方 41 石 42 耳 43 車
 44 門 45 病 46 行 47 店 48 月 49 肉 50 分
 51 日 52 性 53 心 54 口 55 囿 56 十 57 止
 《真 面 (目) 云 (言) 首 (頁) 具 (貝)
 未 末 (木) 由 曲 (田)
 永 (氷) 必 (心) 才 (十) 正 (止)》

第二回

複合文字 (1)

漢数字および第一基本文字を部首とした文字

- 1 林 2 森 3 材 4 相 5 想 6 果
 7 課 8 休 9 保 10 来 11 味 12 体
 13 字 14 宗 15 宝 16 安 17 案 18 穴
 19 究 20 完 21 院 22 軍 23 計 24 早
 25 協 26 直 27 朝 28 世 29 葉 30 古
 31 苦 32 枯 33 湖 34 有 35 存 36 在
 37 聞 38 間 39 問 40 開 41 閉 42 回
 43 国 44 固 45 個 46 兄 47 見 48 介
 49 先 50 祝 * 兌 51 説 52 税 53 覚
 54 視 55 界 56 榮 57 勞 58 加 59 賀
 60 化 61 花 62 貨 63 信 64 恋 65 芸
 66 会 67 絵 68 伝 69 転 70 秋 71 畑
 72 炎 73 談 74 点 75 然 76 燃

第三回

- 77 品 78 唱 79 單 80 和 81 合 82 給
- 83 拾 84 答 85 員 86 損 87 史 88 使
- 89 舌 90 活 91 舍 92 話 93 絹 94 季
- 95 委 96 好 97 姉 98 妹 99 男 100 細
- 101 思 102 胃 103 油 104 典 105 惡 106 応
- 107 係 108 孫 109 泳 110 混 111 財 112 社
- 113 証 114 徒 115 道 116 貧 117 防 118 明
- 119 庫 120 連 121 更 122 便 123 能 124 態

比較文字とその《近似文字》

- 1 父 2 母 3 上 4 中 5 下 6 右
- 7 左 8 大 9 小 10 出 11 入 12 高
- 13 低 14 優 15 良 16 可 17 東 18 西
- 19 南 20 北 21 鶴 22 龜 23 互 24 皆
- 25 凸 26 凹

《天 太 夫 (大) 片 (出) 氏 (低)》

第四回

- 27 尺 28 寸 29 丈 30 里 31 貫 32 匁
- 33 斤 34 屯 35 升 36 斗 37 勺

《斥 (斤) 丘 (升)》

比較文字に類似した漢字

- 1 乘 2 垂 3 浮 4 沈
- 複 合 文 字 (2)
- 1 仲 2 沖 3 忠 4 若 5 佐 6 器
- 7 春 8 因 9 恩 10 央 11 英 12 関
- 13 送 14 規 15 贊 16 肖 17 消 18 底
- 19 紙 20 朗 21 娘 22 郎 23 浪 24 眼
- 25 銀 26 根 27 限 28 退 29 既 30 阿
- 31 河 32 何 33 荷 34 奇 35 寄 36 練
- 37 煙 38 要 39 票 40 標 41 階 42 馱
- 43 沢 44 訳 45 守 46 村 47 討 48 冠
- 49 団 50 導 51 付 52 府 53 寺 54 詩
- 55 持 56 待 57 等 58 時 59 年 60 秒
- 61 量 62 重 63 種 64 動 65 働 66 慣
- 67 負 68 免 69 勉 70 近 71 質 72 所
- 73 折 74 純 75 昇 76 兵 77 浜 78 科
- 79 約 80 睡

第五回

発音文字

- 1 円 2 鬼 3 告 4 事 5 生 6 争
7 対 8 拝 9 反 10 民

漢数字 (二) (十干)

- 1 甲 2 乙 3 丙 4 丁 5 戊 6 己
7 庚 8 辛 9 壬 10 癸

複合文字 (3)

「発音文字」を部首として含む文字

- 1 星 2 仮 3 坂 4 阪 5 板 6 飯
7 返 8 版

「漢数字 (二) (十干)」を部首として含む文字

- 9 押 10 乱 11 打 12 町 13 灯 14 頂
15 貯 16 庁 17 成 18 誠 19 城 20 感
21 減 22 紀 23 記 24 起 25 辞 26 任
27 賃

複合文字 (4)

紹介し落としたもの二十三字

- 1 映 2 革 3 揮 4 禁 5 筋 6 形
7 研 8 県 9 吾 10 孔 11 乳 12 祭
13 際 14 察 15 算 16 実 17 捨 18 洗
19 箱 20 批 21 弁 22 訪 23 郵

* 本書にある「目次」と「既習漢点字一覧」は、点字版にはありません。本文中、枠で囲んだ「庁」「県」「実」の旧字は、墨字版用に付け加えたものです。